

カルヴァンの罪論

吉田 隆

序

2009 年にカルヴァン生誕 500 周年を記念して出版された『ジャン・カルヴァンと福音主義神学へ遺産と展望』の序文において、アリストアー・E・マクグラスは「なぜ今日の福音主義はジャン・カルヴァンに心を留める必要があるのか」について、大よそ次のように述べている¹。1980 年代のアメリカ福音主義における“聖書のための戦い”の主たる神学的弱点の一つは、無謬の(infallible)聖書が誤りうる(fallible)聖書解釈に開かれているという事実を認めることに対する明らかな嫌悪であった。聖書の究極的権威の主張は、聖書をいかに解釈すべきかという実際の問題を解決しない。この現代福音主義の“アキレス腱”と言われる問題を解決するためには、同じく聖書の究極的権威を主張しながら聖書解釈の問題にも誠実に取り組んだ人々に聞く必要がある。そして、聖書注解作業と『キリスト教綱要』編纂とを同時並行的に進めた「カルヴァンは、私たち自身の聖書解釈と神学体系構築にとって源泉となりチャレンジとなる、神学的卓越さの道標また基準を提示しているのだ」と²。

さらに、マクグラスは、そのようなカルヴァン自身が過去の神学的遺産に(決して無批判的にではなかったが)学ぶ人であったことを指摘し、この点でも今日の福音主義が学ぶべき一つのモデルを提示していると述べている。事実、

¹ Alister E. McGrath, “Why Contemporary Evangelicalism Needs to Heed John Calvin” in *John Calvin and Evangelical Theology: Legacy and Prospect*, ed. Sung Wook Chung (Louisville, Kentucky: Westminster John Knox Press, 2009), ix-xi.

² McGrath, “Why Contemporary Evangelicalism Needs to Heed John Calvin,” x.

初期カルヴァンの神学体系は、ルターとメランヒトンにおける福音主義神学を継承すると共に、古代教父たちの信仰、とりわけアウグスティヌスの神学の大きな影響下に置かれていることは明白だからである³。カルヴァンはこれらの神学的遺産に学びながらも、それを究極の基準である聖書の釈義的作業によって批判的に継承・発展させたと言えることができるであろう⁴。

1. カルヴァン神学研究の方法について

カルヴァンの神学について論じるためには、以上のような神学的・聖書釈義的遺産の文脈においてカルヴァンを理解する必要があるのと同時に、カルヴァン自身の思想の多様性や発展史という文脈にも注意を払う必要がある。

カルヴァンの神学理解を知ろうとする者の多くは、その主著『キリスト教綱要』（ラテン語最終版は1559年に出版。以下『綱要』）を調べようとするであろう。そのこと自体は間違いではないが、『綱要』という書物の特殊性を理解しないと、同書を読み誤るだけでなく、カルヴァンの神学そのものを誤解する危険性がある。『綱要』には、独自の著作目的と発展史があるからである⁵。

前者について言えば、そもそも本書は神学教育を施すための教科書、すなわち「ロキ・コンムネス（神学総論）」として書かれたものであって、主題についての聖書の共通基盤⁶を提示することを意図しており、決してあらゆる問題

についての議論を展開するためのものではない。

当時の神学者たちの中でも、人文主義者としての教育を受けたカルヴァンは、とりわけ“ジャンル”についての明確な区別と意識を持っていた。つまり、自らの主張を表すにあたって、対象（信徒なのか専門家なのか）と方法（カテキズム・論争文書・注解・説教・手紙等）を明確に意識していたということである。別に言えば、目的と手段に応じて、カルヴァンは言うべき事とわずにおくことを弁えていたということである⁷。これを混同してしまうと、カルヴァンの多様な言説の意図をつかみ損ねることになる。

『綱要』の発展史について言えば、カルヴァンの神学形成に少しでも関心のある者は（ラテン語原文を参照しなくとも）バットルズ（F. L. Battles）の英訳を利用するのが最も容易かつ有益である。そこでは、『綱要』の1536年初版から1559年最終版に至る諸版の文章が記号分けしてあり、カルヴァンの編集の跡が手に取るようにわかるからである。

本稿では、これらのことを念頭におき、まずは罪についての神学的伝統を確認し、その上で初期カルヴァンの罪理解から『綱要』第二版、その後の著作におけるカルヴァンの罪論の諸相を考察し、最後にカルヴァンの罪理解の特徴を検証したいと思う。

2. 罪についての神学的伝統

（1）アウグスティヌス以前

聖書に明確に記されている罪をどのように理解するかという問題は、人間という存在をどのように理解するかという問題と深く結びついている。初期教父たちは、古代のギリシャ的人間論に深く影響されつつも、聖書に基づくキリスト教人間論を徐々に形成していった⁸。そのような中で問題となった事柄は、

³ 例えば、拙論「天上の知恵：初期カルヴァンの終末論」（『改革派神学』28号、2001年、所収）、「カルヴァンにおける『最後の復活』の教理」（『改革派神学』34号、2007年、所収）、『カルヴァンの神学と霊性：来るべき生への瞑想』（新教出版社、2007年）、「カルヴァンのレクイエム：Psychopamychiaにおける終末思想」（アジア・カルヴァン学会日本支部編『新たな一步を：カルヴァン生誕500年記念論集』、キリスト新聞社、2009年、所収）などを参照。

⁴ カルヴァンは、生涯学び続けた人物であり、とりわけ後期においては中世のいわゆるスコラ神学を批判的に吸収していることが明らかになりつつある。また、聖書釈義そのものについても、古代から中世にいたる多くの聖書注解（旧約ではユダヤ教のラビによる注解）と対話しつつ自説を展開していることも、今日多くの研究者が指摘するところである。例えば、David Steinmetz, *Calvin in Context* (New York: Oxford University Press, 1995)を参照。

⁵ 詳細については、拙著『カルヴァンの神学と霊性』15-20頁を参照。

⁶ “ロキ・コンムネス（Loci Communes）”の文字通りの意味は「共通の場」である。

⁷ 例えば、カルヴァンが本格的に罪論を展開する1539年版『綱要』の3年後に記された『ジュネーヴ教会信仰問答』では、同書が青少年向きの教育書でありかつカテキズム（律法・信条・主の祈りの解説）であるために、ほとんど罪についてまとまって教えている箇所がない。かろうじて信条におけるキリストの贖罪や「罪のゆるし」、また主の祈りや洗礼などの関係箇所でも触れられるだけである。

⁸ J.N.D.ケリー『初期キリスト教教理史』下（ニカイヤ以後と東方世界）、一麦出版社、2010年、120頁以下；ルイス・ベルコフ『キリスト教教理史』赤木善光・磯